

# 『 スクミリングガイの生態を探る 』

天城妃奈 大杉健斗 武内悠樹 坪本啓嗣 村上健

指導教員 岩本英男

## 1 研究の目的（ねらい）や意義（背景）

近年、生態系被害防止外来種に指定されているスクミリングガイの被害が日本各地で多発（\*1）している。主に被害を受けているのは稲である。そのような状況にもかかわらず、スクミリングガイの国内認知率は低い。実際、私たちもこの研究を始めるまで田んぼにあれだけたくさんのスクミリングガイとその卵塊があっても気づいていなかった。田んぼとその周りの用水路をスクミリングガイについて知っているのと知らないのとでは見え方が変わる。スクミリングガイについての情報を子どもたちにも農家の方々にも共有することで、わずかでもスクミリングガイによる被害を抑制することを目的として活動を進めている。

## 2 調査状況

スクミリングガイの被害抑制には、地方の農業団体や市町村、国までもが取り組んでおり、先行研究では金属の銅を嫌がる（\*2）ことや、直流電圧をかけると負極方向に移動する特徴的な行動（電気走性）を示すことを発見（\*3）しているが、明確な対策や防除・駆除は確立されていない。そこで、私たちはいきなり駆除や防除方法を考案するのではなく、まずは生態調査を行うことにした。

生態調査の過程で、姫路水族館の増田さんと太子町龍田の田んぼで稲を育てている栗岡さんに話を伺った。栗岡さんに聞いたところ、農薬を使っている稲は成長がはやいのでスクミリングガイに食べられない。農薬を使っていない稲は成長が遅いためスクミリングガイに食べられてしまうと聞いた。

## 3 進捗状況

初めに、スクミリングガイの生態をインターネットで調べた。次に、スクミリングガイを、田んぼに捕りに行った。捕ったスクミリングガイの殻径・殻高・螺旋上部の長さ、重さを測った。スクミリングガイを観察している際、普通のタニシでは、見られない呼吸管を発見した。水面下4センチの深さにスクミリングガイは多く分布していることが分かっているため、呼吸管の長さに関係していると考え、実験をした。後ほど、姫路水族館に訪れ、スクミリングガイに詳しい増田さんに話を聞いたところ、鰓呼吸ができるので、呼吸管の長さは関係ないことが分かった。田んぼの所有者の栗岡さんにも話を伺った。

## 4 今後の展望

今までの研究では、スクミリングガイの生態調査や被害を受けた水田の訪問、水族館などへの聞き込みを主な活動としてきた。よって今後は、調べた情報や入手した資料を用いて、スクミリングガイとヒメタニシの生態の違いを調査していきたい。調査の結果をもとにスクミリングガイの防除や駆除の方法を見つけていきたい。他には、スクミリングガイを駆除すると大量の死体が出る。そのため、その大量の死体の活用方法も探究していきたい。

## 5 参考文献

- \*1 スクミリングガイの日本における発生状況と農薬による水稻の被害回避における問題点  
農研機構 九州沖縄農業研究センター 和田節
- \*2 スクミリングガイに対する銅剤などの殺菌剤効力について
- \*3 ジャンボタニシを電気で捕獲、超音波で退治